

雑踏の中のアンコールワット

このところ海外に出かけるとなると、何かと「間の悪い」ことが多い。一昨年、訪欧した時は、九・一一事件の直後の十三日だった。ロンドンのヒースロー空港で酷い目に遭った。今年二月にタイ・カンボジアに行ったときは、前日は恒例の、そろそろ三十年を迎えようという年一回の会合の日だった。痛飲し、寝ぼけ眼で空港に向かうハメになった。

これだけなら「まあ、しょうがないなあ」と済ませることができただけけど、この三月に再びタイ・カンボジアに行くこと決まったら、タイの人気女優が「アンコールワットはもともとタイのものだ」と発言したということで、カンボジアの首都プノンペンにあるタイ大使館が焼き討ちに逢うなどの騒動が起こった。続いて、ついに米国がイラク攻撃を開始した。また気持ちの晴れないままに、成田に向かうことになってしまった。

そんなときは悪いことが続くものだ。成田空港への高速道路の分岐点をうっかり通過してしまい、佐原インターまで行かされた。余裕を見て出たのに空港に着いたのはギリギリだった。また「ピンクの象さんワッペン」を貼られて急げ、急げとせかされる恥ずかしい思いをするのかと観念したところ、成田は閑散とし、荷物検査も簡単に終わり、何とか普通に乗ることが出来た。同行Mさんともゲートで出会うことができた。何事もなかったかのように挨拶を交わし、別れて自分の座席に向かった。シートベルトを締めたとたん、どつと疲れが出てきた。

海外に出かける時には、最近では、ノートパソコンの代わりに、買いだめした本を五、六冊は持って行くことにしている。でも今回は、バンコック到着まで約六時間もあるのに、ページをめくる気分になれなかった。見たい映画もなかった。隣はいかにもタイに遊びに行くという風情の中年男性だ。ウキウキしてバンコックの歓楽街の案内などを読みながら、何かと話しかけてくる。煩わしいので、音楽を聴きながら狸寝入りを決め込んだら、そのまま寝込んでしまった。

見違えるプノンペン空港



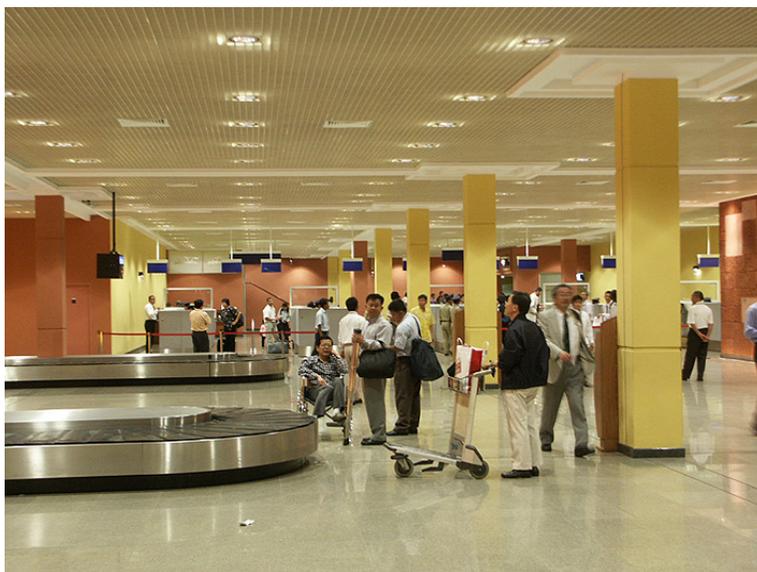
以前はバンコックに行く度に、その目覚ましい変容ぶりに驚かされたものだけれど、中国とかカンボジアなどもっと激しい変化を目の当たりにする機会が多いためか、感慨が薄れてきている。年齢のためだけとは思えない。人間はより強い刺激を求めるようになるというけれど、多分、それだと思う。日本に比べれば、はるかに活気に溢れているのに、それがピンと来なくなってきた。井口さんなどと逢って用事を済まし、談笑しながらちよつと珍しい美味しいものでも食べる機会に恵まれば十分だという気分になりつつある。二月に大勢で来たときも、大部分の時間をホテルの部屋で横になって本を読んで過ごした。

ところが用事を済まし、バンコックからタイ航空でプノンペン空港に着いたら驚きの連続だった。

約一年前に立ち寄った時にも、トンレサップ川とメコン川が合流する付近にある川沿いの小綺麗な公園を楽しそうに散歩する人々の姿を目にして胸を打たれた。内戦の傷が生々しく残る薄暗い街と物乞いの子供たち、共同通信社の人々が亡くなる事件も起きた内紛再発に遭遇して緊張の日々を過ごしたことなど、何回かのプノンペン訪問での記憶が忘れられないでいたからだ。

しかし、その時は、空港はまだ国際空港とは名前だけの平屋の粗末な建物だった。それで、今回もまた機体からタラップを降り、コンクリートの路面からのム

ツとする照り返しの中をトボトボと歩かされるものと覚悟していたら、新築の建
物に横付けになり、そこから「蛇腹」^{じやばら}が伸びてきたのには言葉を失った。聞けば
昨年、プノンペンで開催されたアセアン会議のために突貫工事で作られたのだと
いう。荷物のピックアップ・コンベアもある。建物を一步外に出ても成田や羽田
も顔負けの瀟洒^{しょうしゃ}な雰囲気である。物乞いや客引きなどで溢れていた場所だとはと
ても信じられない。



戻りの時にも
驚かされた。免
税店や飲食店も
あるし、ビジネ
ス客用のサロン
もあった。用意
されていた飲食
物は文句を付け
ようがなかった。



このところサービス低下の著しい日本のエアラインよりも遙かに心地良いものだった。もつとも、まだ整備中で、ショーケースだけの店舗が目についた。でも、あと数ヶ月後には土産物屋で溢れているだろう——そう考えておかなければ、また驚かされることは間違いないと思った。

プノンペンにもラッフルズ・ホテル

空港から市内までの道の舗装も整備され、両側に立ち並ぶ建物からは弾痕など戦争の痕跡が消えていた。タイ大使館やタイ系企業に群衆が殺到し、投石し、焼き討ちする様子がニュースで流された。だが、その跡は言われれば分かる程度のものにすぎなかった。やっぱり映像報道の魔術だった。街は何事もなかったかのように活気に溢れていた。急増したバイクの往来で混雑する大通りの交差点には、信号が変わるまでの時間をデジタル表示する最新式信号機が付いていた。



繁華街を抜けると両側に大きく育った街路樹がある通りが広がっている。ガタガタに荒れていた道が見違えている。美しい街並みから、かつては「東洋のパリ」とか「小パリ」と呼ばれていたそうだけれど、それを彷彿させる雰囲気は生まれてきている。





これまでプノンペンを訪れた時はトンレサップ川沿いある大きなホテル・カンボジアーナを定宿としていた。まともなホテルはここしかなかった。内紛再発時もここに宿泊していた。一夜明けたら、ホテル周辺に緊張した面もちの兵隊おもが展開していた。ホテル関係者も事態が飲み込めず、ただオロオロしていた。遠くから爆発音のようなものが聞こえた。携帯電話もなかなか繋がらない。そんな中を寅さんと、顔なじみになった現地の案内人と一緒に政府関係者などに会うためにウロウロしたことを昨日の出来事のように覚えている。

ところが今回の宿泊先は違った。ホテル・ル・ロイヤルというところだった。着いて驚いた。建物自体は記憶に残っていた。荒れ果てて進入禁止の柵があったように思う。それがフランス時代の面影を残す格式の高いホテルに生まれ変わった。一步、建物中に入って、天井の吹き抜けに見とれ、まさに狐に化かされたような気分だった。部屋に案内され、初めてラッフルズ系列のホテルであることが分かった。アンコールワットのグラランド・ホテルとまったく同じ内装だった。



置いてあった説明書を読んだら、建物自体は一九二九年開業の多くの著名人が愛用したホテルで、それをラッフルズが買い取り、面影を残しつつ全面的に改装し、一九九七年から営業を再開したのだという。アンコールワットのグラウンド・ホテルとほぼ同じ時期に開業していた。



そして同じように欧州各国からの旅行客で混み合っていた。プールサイドで読書と日光浴をのんびりと楽しむ光景も同じだった。もちろん泳いでいる人もいた。つい数日前まで寒い東京にいたのが嘘のようである。滞在中、時間を見つけ、プールサイドで上半身裸になってマルガリータを飲みながら、数時間、読書で過ごしたのは言うまでもない。

昔ながらだったのはメコン川流域の低湿地帯にあるレストランぐらいだった。スイレンが咲き競う沼地に打ち込まれた、たくさんの木の杭の上に作られている。道路からは栈橋のようなものが伸びている。雨期になると水に浮かぶレストランのようになる。

ここで食べたエビやカニは最高だった。カニ青胡椒煮、いわゆるペッパー・クラブは絶品だった。フォークとスプーンを一緒に出される熱湯の入ったコップに浸け、皿はティッシュで拭くという作法で食事する。とりあえず殺菌・除菌のためだ。でも、気休めにすぎず病気の心配はな

くならないけれど、食べ出すと、不安など吹き飛んでしまった。すっかり好物になった淡水魚の干物を肴ひもの さかなにアンコールビアでの乾杯は至福のひとつきだった。

アンコールの遺跡は人の群れ

ところで今回の一行は、ここプノンペンから帰路につくグループとさらに上知大学・石澤良昭教授の案内でアンコールワットにまで行くグループとに別れた。石澤先生から頼まれている小論の校閲も残っていたし、それに先月に来た時の印象がまだ強烈に残っていたもので、僕は迷うことなく帰国組に入った。



先月、アンコールワットに来た時には、まずプノンペン空港と同様、シユムリアツプ空港が様変わりしていたのに驚かされた。昨年春に来た時に工事中だったの改装されることは知ってはいたけれど、完成してのを見るとやはり驚かされた。それまでは国際空港とは言うものの、とても空港とは思えない粗末な平屋がポツンと一軒立っていただけの姿が脳裏に焼き付いていたからだった。

コンクリートの管制塔はあるし、建物には冷房も入っているのだからビックリだ。しかも、大きくなって職員なども増えていたのに、それ上回る観光客の急増で混み合っていたのには圧倒された。欧米や中国からの大勢の団体客で入国手続きは混乱していた。長い列の後ろに並ばされ、延々と待たされた。初めての経験だった。これは大変なことになるかもしれないと思った。そして、この予感、事実、その後、次々と的中した。



当時の生き生きとした庶民の生活などもうかがえるレリーフと四面仏で有名なバイヨンでも観光客が列を作っていた。とてもゆつくり楽しむ雰囲気などない。日本の展示会場で後ろから押されて歩かされるようなものだった。



あえて修復せずに、発見された当時の巨樹と遺跡の激しい攻防の様子を残してあるタプロンも同じだった。大勢の観光客と回っていると遊園地で「作り物」を見ている気分になった。人影のほとんどない中で、自然の力に改めて感動を覚えた頃が懐かしくなった。



アンコールワットの石畳の表参道には、前の駐車場にひしめく観光バスからゾロゾロと降りてきて、強い日差しを避けるためパラソルを開いて歩きだす観光客がたくさんいた。アンコールでパラソル。初めて見る光景だった。駐車場はさらに拡張され、その向こうには気球が上がっていた。聞けば、上空からアンコールワットを眺めるためのもので、結構、はやっているという。陳腐な観光地の雰囲気漂い始めていた。

アンコールワットの有名な回廊の壁画とか、頂上までいく階段なども観光客で溢れていた。ガイドの説明や行き交う人々の会話——英語、フランス語、ドイ

ツ語、中国語、韓国語そして日本語が、それも大声で飛び交っていた。日が沈んでいくなかで、柄になく荘厳な雰囲気には圧倒されたのが嘘のようだった。



夕暮れの眺望が素晴らしい自然の小さな山、プノンバケンはずなながら槍ヶ岳の山頂のようだった。もう何度も登っているけれど、昨年、登った時には啞然とさせられた。石澤先生と二人だけで山頂で地平線に沈む真っ赤な大きな太陽を見ながら物思いに耽った場所とは、とても思えない。しかも、今回は、もつと酷く、昨年とは比較にならない混雑だった。麓^{ふもと}では観光バスが駐車場から溢れていた。それを見た瞬間、山頂に行くことは断念した。バスの中で、一行の帰りを待つことに決めた。

アンドレ・マルローが、若い頃、盗掘を試み逮捕され、その体験を基にした小説「王道」の舞台となったバンテアイスレイも興ざめな状況にあった。何故だか分からないけれど、スイス・グループが発掘作業をやっていた。すでにフランス・グループが手掛けて完了している場所だし、手付かずのところも山のようにあるにもかかわらずだ。売名行為としか思えなかった。遺跡保存修復の国際競技場と

言われるアンコールワットならではのことだと思った。せつかくの遺跡を台無しにしていると腹立たしくなった。そこに場違いの日本のフィルムメーカーの広告が目飛び込んできから、不愉快の極値に達した。



輝く子供たちの瞳

初めての人はともかく何回も来ている僕にすれば、カンボジアの人々が平和の中で生き生きとしてきていることは嬉しい限りだけれども、アンコール一帯が無秩序に俗化し、環境が破壊されてきていると心痛む日々の連続だった。唯一の救いは、観光スポットをちよつと離れると、まだ豊かな自然と素朴な人々の生活に触れることができたことだった。

バンテアイスレイからの帰り道だった。道に沿って発展した村落やかなたまで広がる水田などの風景に見とれていたら、道沿いに砂糖椰子さとうやしから作った粗糖さとうやしを売る売店があった。聞けば、一帯は砂糖椰子の特産地だという。ココナツツなどの

椰子とは違う種類の椰子^{やし}で、この椰子^{やし}の実の付く茎の部分を切り、そこに瓶^{びん}などを付ける。するとヘチマ水のように瓶^{びん}に液体が貯まる。それを集めて煮詰^{にっ}めると粗糖が出来る。コーヒーなどに入れて飲むと、なかなか美味しいという。シユムリアップの市場で試食したことがあったけれど、砂糖椰子^{さとうやし}の実は見ることがなかったし、適当なところで車を止め、買い求めることになった。



ある売店の近くで車を停めた。試食を始めたなら、あっという間に子供たちが集まってきた。どこからともなく湧いてきた感じだ。一行十人あまりが買いだしたもので、大騒動になった。わざわざ赤ん坊を抱いて出てきた女性もいた。最後には大勢での記念撮影とあいなった。

「今日の売上げは大変で、今晚はお祝いだらう」、「寄ってきた子供は孫じゃ



ない」、「気が付いたら子供に囲まれていた」など、バスに戻っても一行の興奮は収まらなかった。誰もが無邪気な子供たちの姿に心を打たれたようだった。ホテルに着くまで話は尽きることがなかった。

ところで今回の一行の目的の一つは、アンコール遺跡の環境問題の視察だった。石澤先生を団長とする上智大学アンコール遺跡国際調査団はカンボジア人の手による遺跡の修復保存を旗印に活動を続ける同時に、環境問題を考慮した「遺跡・村落・森林との共生プロジェクト」を進めてきている。昨年、アンコールワット表参道やバンテアクデイの修復保存などを地道に続けてきたなかで、バンテアクデイから「三百体あまりの廃仏」を発見するなど華々しい出来事があった。だが、観光客の急増などもあって環境問題の発生を積極的に防止する方策を講じないと大変なことになるという危機意識は強まるばかりで、それに関して一行は微力ながらも貢献しようというのだ。





調査団の拠点、シムリアップにある研修所も訪問した。今年度から上智大学アジア人材養成センターの本部となる施設だ。そこで、これまでの活動などについて説明を受けるとともに、発掘した廃仏なども見せていただいた。



アンコールワット表参道の修復にしても、少なくともあと三年ぐらいはかかるという。やると決めた以上、少なくとも百年ぐらいは保つものにならないと、後の人に笑われるから……と、現場を担当しているTさんに説明されると、

二の句がつけない。石澤先生となると、「アンコールはあと数十年やつても終わらないでしょう」とこともなげに話す。もう二十年以上もやってきている人に、軽く言われると、「そうですねか……」としか言葉が出てこない。



こんなやりとりを横目に、研修所に迷い込み、いつの間にか、いっぱしの番犬のように振る舞っている犬は、風通しの良い階段の途中に陣取ってウツラウツラやっていた。「ドッグ・イア―」と言われるくらいなのだから、関心がないのだろう。

蛇足だけれど、この三月の帰りの機中には、奮発して買った四〇〇〇円以上もした本を忘れてきてしまった。家に戻って気が付き、慌てて問い合わせたけれど手遅れだった。機中の本は読み終わったものとして廃棄するのがマニュアルだそうだ。終わりも悪かった。

二〇〇三年春 伴 友貴